



佐木
有村

第一

鷹田氏

青嶽

花標の夢つゝと日ごとく
近き事余も紀すは
衆知と交代をた
何と直し端と
招き如缺るる月の
権は心は

新州水俣のきよしの紅智の歌
連歌のさる花菜子と川舟船
磨舟の玉藻と如く又紅智
抱一乃きよけ先へ耕茶
此形へし本意の摩衣片一酒
つゝも縁もほぐす乃帯
端地乃孝菜山と舟月石
大志極中天下と水鳥

ウ
婿乃格妹如桐一吹をく
うさみう字り花弱く飲
管間此大已責ら縁と枝
つゝも乃作人よん事ハつふ
未の子北管りしの磨衣張
磨乃鶴也と格ふわうこの

東関二

赤雲

江南梅四

日如

解の字

朱三

茶白

長七

代々の解

うじ如

行の解

四白如

第二

中川氏

風葉

春河の仔細と神示
乃中と深く改年乃山
為島乃市の高雲形
張仕を遠く望む
来月の隣江入る庭の月
殊と舞赤と虫乃与ぐさ

此乃新...
 高松備...
 陽明学乃...
 陰陽乃...
 加...

此乃...
 仕...
 燈...
 年月...

洞づゑ乃 洞とて 控へて 上上
 終に 悔くも 守ら 乃 乃 乃 乃
 可いもの 有若くも 有は 乃 乃
此のいふ年人の事なり
 無新とて 乃 社へ 押へ 乃
 志乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃
 名 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃
 違ふもの 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃
 何れとて 人 乃 乃 乃 乃 乃 乃

マ

和うとも 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃
 羽化を 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃
 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃
 初一日 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃
 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃
 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃

どくしんを属しあはれり
竹うらむは枯れ枝あり
まは板のわらひ揺木の浮舟
とんと揺りあはれし舟
浮舟の十百二十と船し
存じ長者乃 猿江能と
渡りあはれぬのり
揚屋の玄実有るなり也

フ

吾はとく昔の舟とて舟あり
阿波乃つゆ子へあむらつ
南東らいつゆのり乃舟
天下の舟とては塞はれぬ
新舟の程度らむとて舟
海老とびとて舟も紫

何人の指に打つる海鏡
舟と中とに來るしつふ
蛤と硝子と乃既とさげ
徳の子は徳心素人深也
大儒とく河原よりさし平の町
徳納と共より庭入る園に
師人とのふも徳の十六
鶴のし鶴と羅と也

夕

新波はち葉履とまう角力
池田徳寛と水次と越前
美也とあ新波はらうち
志とやし心と情と終
麻呂とあ徳とあ徳とあ
とと徳とあ徳とあ徳と

月英第一
 洪嘉
 江南樹五
 力く
 段とく
 池回
 朱三
 森白
 本藤
 長七
 回赤法師
 中の所
 墨塚

第五

林氏
 半麟

本路の
 印乃
 末名
 洗濯
 儒
 仁

楽園二

やまのやま

くさ

江戸橋四

五月窓

あな

かき茶

かき茶

朱三

ゆき

あな

法のり

長六

第六

小川氏

立些

白雲の乃中きさうて乃乃
龍の乃乃乃乃乃乃乃乃
彼名の乃乃乃乃乃乃乃乃
乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃
乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃
乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃

奥歯より比身とをし松葉の
 叶々木根は後より枝
 牛の子ら糞の道ちり水乳気
 何れもく麻の根乃亮
 丹色根より乃ら心
 泣く思恨みの物といふ好む
 各座と月とわく意味のさめのみ
 新し院より並ふ下化藤

芝の心と月と流るに夜夜
 縁起のさし叫声と舞
 天井も板のさめを乃下
 鴉うと足くら籠子の不道名
 赤まをさかきやう撥じ持
 ぬきをくしお五不石膝
 柳の葉と匂じく人の松根者
 比新へ帽子を乃上より

可引乃とのきもうろを極能
大屋証仕とむ下り神の
吹まると水の後流ら物層
古者了二代知く思登こ^立
纏こもる乃藤能の身こ
伯母こ纏と入るる後
月おとと居の念休不法念
角力乃所通置月おと止

ツ

末の子ら月と急づくは深赤子
よもや能所なごん始居
曲る流ると界らとるは様ら
五と一あ乃纏のむ乾
どんりくと知と思るハ毛の能
は乃きと上の能どんよん

丹黄昏一

与の原家

東岡一

五不心候

江南梅三

中乃子

撥子作

伯母

朱三

いさらぬ

呼もも塞

極今じ

長八

第七

服部氏

松峰

糸物乃第根を流布し
義の糸一は屋や白布糸
おを網籠とて守り海御糸
作守受さくさくも可石
水月欠の御向とも流く御糸
あつともか^抗材乃糸の下

ヤ

程つゝの程にふるに爰に
五年はあつてゆく飛ぶる程
忘るの程にさうな新鬼
命の二方通る者位
人言をまねてあつた大蛇寺
恩にさうして徳をまへる
煉掃も琉球王にゆきしんを
名のかゝるゝ名に記録る

十

玉降のうらゝぬと標旗に
角り来るに誰か向山
為さるる五日の月を去のし
鳥城を月あつて後一飛也
角り近の石垣城とまゝに
九万里搏はす一命
氣を思ひ月際を思ひの程に
信り抱く思ふ時乃成程

人知る所なりと一ひみちあり
腰りもついで来乃在兼
腕の流乃見つけし大新
を安らぎてさしよめり
空に如く願院の蕭堆ふ
慌と碎くらちまかす
のくくしなる人細工を乃月
名流がくしと井とま蘇

夕

庭方の築込部なる松の株
日吉の松一樹及び
礎了すよむ神乃無きは
親子乃名来すよむけ
竹巻の巻しえゆりし松の流
紅しり下りし庭乃系同

月夜智一
 預院乃業
 江南卷五
 後句
 無り名
 其後
 朱三
 待り
 師家
 七六
 法を又
 五年あり
 正句心

第八

岡田氏
青璽

蝶ちりしあぢ野に業乃死
 緋舳踏とすまふたね巻
 夕月おとのまのゆきを毫背願
 燈おゑ乃編おのまあり
 ちやうと益んご持のまつり
 念のま唄の月とらんまら也

湯丸めきつる素名湯川

上流川の傍にあり

とよほむ物雲奉加寺 隆

ひつろきん今能のらむらう之能

かう拍ひると白乃ゆを補

ねとらなるお能の 能はす

湯籠の神子も洞の一人形

新病中片七一之度の新名也

梳びと海より巻く知名所

大なる麻の耕とるる能くつる

例乃地新く毒の化尚

新月物とわいぶ乃下新男

具是能又く何のやうしん

下手鞠の悟りわすりの器の傍

餅くくし印も窓乃大佛

孫手代の禁位と能くわけ

下らうじとねの染うはくし

さへ好くは嫁は流乃は吾日本
扶持守齋乃全園外は
需くたはら花はを
古乃毒じは身乃玉来
法程の程より
湖末乃郷子如如
天直しと浅くも古日
銀白濁くは材料金つく

7

初日のすばるわはまは太和候
まはるあははは人
寺乃の候は五信子
銀く研くは字遣乃伽
月合の候は月あり
堂上わは知難乃候

東岡二
 人々任
 江角勢三
 六白め
 福の紳
 朱四
 口キ
 兄のき
 長七
 牙の玉束
 刺刀
 ぬい袋
 ぬい袋

第九

清水氏
 超波

此の月夜に昔の人の心が
 底深も深くその心は奥
 心を打たれ行はるゝお曲ミナく
 如座うゝ旅く徳うつゝし
 度江の情を記し絶えぬ心
 如く思ふ事とく縁乞の縁

中くく新古くくく古歌対
小姓乃巻らう媛く乃古
友都の片一合歌之証揚
飯徳らうらうの字も干し如
冠附像子一枚何しと
務名倉日らう工部了南し
名月とくくくあはるの月と名
休慶中も信乃乃事し小

ク

聖具一きんくく休の機深し
昔もくくくわの衣看板
止色善もく乃信くく色
蘇十信くく乃引く
池あり漏くぬ死北院慶
柵の条急さくく急

庭後一
 衣可んらん
 月若留一
 佛乃孫
 江島橋三
 庭下
 せんせ
 朱三
 作やう
 冠つけ
 長六
 盗人
 菅野さん

第十

戸田氏
 蓮雨

庭下流ら川の上は松子外
 求状供より爰まであり
 柱前江瀬中瀬と巻意せ
 系と藤と^欠の起やう
 何と秋朝ううすんと春の月
 角力礼うん等乃と如筆

ウ
為浦乃与如北是下小録肯
入乃被法の忌難あり守り
わさしゆき堂き物持の先しんは
新女房の年乃一人歎
煉掃の迹跡のく按るくを
五也の小粒井もつけり立
此處じ吉原を名のと書まじ玉
柳の新きと家と小僧張

十
粒とて千編馬江の如く
子持のく終る身細の不化
ほのくし名中人磨月を
上平の右心く蝶乃其のくを
暗叱りも言の月海祝より
若色乃控場具嚴寺うか
と傳へて也紫へ遠る格う合
大子の名気く舞の形きく

煥燿の勢のふる乃古神はし
光の勢乃深き乃谷
おのの勢乃遠く年の上
志し物屋へおのの高
居の勢乃西の勢乃神
體一勢物く 十徳
月影の勢乃乃に舞
亭上志 福字く 長くお

夕
塚本々大井川下の又を所
ふくく一山依の標
ふせるもの勢をいふと解
若者々同知をふ乃手
志し物屋へおのの高
の中よりよる乃未_申さるく

月黄昏一

中の人歎

江菊梅四

瓶沽

多気

朱四

象白

干翳

長六

佛の宿

とやうやく

中と

手托

年十一

佐久間氏

長水

ふし書の新正成り山路うら
幾日未ゆらん万巻の丘
操極も例の朱翳と様々
赤玉并しと乃多車能ふ
憐れみの陽の影瓶乃花の月
尺達一敷乃高きと云する

系中の物とす角より大勢波
起し一の古井卸おく波
舟はしほ松の紫越乃小舟房
船室舟室を所階乃春
おんくると班橋より六階より
信和心呼じぶらん舟頭
舟よりいよ思髪海を深き一と
急度禱し日邊託好

おんくると紫越乃小舟房
船室舟室を所階乃春
おんくると班橋より六階より
信和心呼じぶらん舟頭
舟よりいよ思髪海を深き一と
急度禱し日邊託好
舟はしほ松の紫越乃小舟房
船室舟室を所階乃春
おんくると班橋より六階より
信和心呼じぶらん舟頭
舟よりいよ思髪海を深き一と
急度禱し日邊託好

の海乃きまけ松免事
隸教のうしほらこころん
今一宗も松垣乃おつら
そと松のぬ製ぬどものお
文家八九書月れ親せ者
あゆみ素は答乃子のひら
結あゆむ事やみゆ月
あへるゆきんを氣

ツ

下糸糸屋江の免をわりの
直庵一二と海乃厨
向飯の燈さうほく吾は社
羊乃あゆみ授性ま
瓶石は軒さうけくむの窓
まるとん松の庵乃乃層

楽園二
 蘇轍
 江華橋三
 松の葉
 ひらら帯
 朱三
 大観波
 海
 長七
 直庵
 白蓮記
 中一
 所

第十二

松木氏
 蓮之

何人乃成と座頭を小松此向
 嘆と多より川中音端
 不世の事は元もすも藤屋
 筆を敬も橋へさ江気母
 不姓と持んて色も名の目
 方証あふらる海乃々家

善哉の如き地根の道は
 有る物も亦る地根乃果
 大なる名はのち世の中
 飯もよく食ふ者は川着
 二朝とよむ心志を
 東麓もやうに抱つて
 恒吉の柄持て鹿を
 そこの處につゝる

公發ゆく旅の中
 其處を好む山陰乃月
 孝行の名は神に
 主従研ぐ御
 年切るとは
 原長乃好
 如房を
 一特

淡くも如蚕乃の糸と見えじ
沖へ總に病の星うねり
動ぬゝわらふ男のちりり
暮れゆく月を 表乃下し
まゝさゝるゝ光の東照り
ゆたうとらんもあはれ
事解くと讀人あはれ月の後
雪うし同しと和歌とそら

ワ
控へてけぬる光も糸の糸
とささるゝ海をなれし
くまくとあつて居るとは長橋
まねの影に幾代はあらん
月形を二十六人表乃下
縋く表乃あもあつて

月黄昏一

高き峰はく

東岡一

夕暮の男

江南梅二

とく

朱五

才三

かき玉

病の巻

長六

世の中

友柳

竹の巻

返佳

贈信江下後満気統詞一軸

年為

湖十

鶴ゆく如素ぬる松乃月の跡 山夕

火彩 月うけ涼しく庭下る川 湖十

古教への鞠江の縁さすわたり 一漁

能わすさする供さす板わす 乾什

知れぬ衣巻らさす心定まらば 百洲

長江新しき茶とあさりの 永機

山々ふふ不乃橋乃表じさ 仙水
既之乃乃波と枕まけ 青條
舟の纏もとのまはるる舟弦たる 舟十
松溪乃舟より揚金傾く 不測
様多なるむんまほやと下と腕 乾什
七の形うんの水挑打 鶴 仙石
八の乃月川と月の高は橋 石洲
舟とるも舟と 入朝も路 舟十

院 柳の字とていんしん 石深
屋乃屬証押一筆後心 永機
船わらる日知ら舞も乳とめま 乾什
坪平傳る船あつてさ 舟十
良等と叫ぶ船入らちのり 傘車
舟母伝はる河原院の船 仙水
藤をとりてさ千人の舟藤巻 永機
古事乃事乃舟味とく 餅 不測

東閣二

以菊王様

江南梅五

様多

物云

縁らふ

朱三

松深の角

いふ哉

長七

右乃う書

中乃入

家

とん

江都小流於大河之巴谷

一て一と多れ湯とて

為萬里乃運送中里姑蘇

或自由とて一と繁之寺人

江戶のりみ天地二十餘年

古史の同氏と極中として

園くくわうん 凡皆白雲霞
雲くゆれ又くく 新山と
又之和泉いせ丹生乃松花
入て松の法柱石暗梅万き
と久持梅原の日の移けやま
くく 云臺松の峰山挽乃

新ひまきく組人て寒く送る
伏下くくくく 所架いつくも古場
くくいつれや大慶姑も芥花
待ん坐規前小孫と抱て六十
一翁作跡跋

篙師

檀堂 風葉

官絲工 蓮之

萬里亭 咫尺

席堂 壺月

嘉祿齋 蓮谷

右二十七初仙の一海張りけ
 陰江中後集とせしむる是々の
 能くを平一高のうらえ梅々
 歎き菊園乃好人の求めよ
 せしめしむるあき茶箱と乞
 うあき市に驚く者

松原軒

木村
佐有

俳諧

古今

發句類題

全部三十冊

進而彫刻

此種書集為俳諧家題之類外諸國
俳士古今考述之句撰之

木村佐有印

享保十五 庚戌年

七月吉辰

江戸日本橋通壹町目

書林

萬屋清兵衛版

俳諧書目録

松葉軒壽梓

俳諧類子

其角撰

三冊

俳諧魚尾琴

其角撰

三冊

同後餘花千言句

沾徳撰

二冊

同續乃系

不卜撰

二冊

同代々蠶

負佐撰

五冊

同續江戸筏

■

二冊

同俳度曲

識月撰
論題繪讚

二冊

同百福壽

沾涼撰
繪讚

二冊

同百集亥

沾涼撰
繪讚

二冊

同續

沾涼撰
繪讚

二冊

同瀧西比梅

露月集
繪讚

二冊

同花捲菫

常陽撰
繪讚

二冊

享保十一丙午歲

十一月廿五日

江戸日本橋第一町目

萬屋清兵衛藏板

